

ドイツ・アウクスブルク市訪問日記

菅原 彩

はじめに

今回の訪問を通し、アウクスブルクという町について知る、そこに住む人々と交流する、異文化とふれあうなど、多くのことを体験し、学ばせて頂きました。中でも、一緒にドイツへ赴いた仲間との友情の芽生えは予期していなかったものでありながら、この旅の大きな収穫だったように思います。

個人で行く旅行であれば、見ることの出来なかった場所、出会うことのできなかった人達と交流できたことは、使節団員の一人になれたからこそだと思います。本当の家族のように接して下さったホストファミリーの方々、事前準備から当日まで手厚いサポートをして下さった尼崎市・アウクスブルク市のスタッフの方々、そして尼崎団員を引率して下さった団長・副団長にはとてもお世話になり、感謝しています。

一日目(9月14日)

アウクスブルク到着後すぐ、お世話になるホストファミリーと対面しました。私がお世話になったのは70代のご夫婦のお宅でした。年配の方の中には英語が得意でない人もいと伺っていたのですが、とても流暢な英語を話し、美しい文章を書かれるご夫婦で、ドイツ人の語学力の高さを垣間見た気がしました。逆に私はというと、英語と違って耳慣れないためか、何度言ってみてもなかなかドイツ語の意味や発音が覚えられず、この訪問の間ずっと自分の覚えの悪さを痛感することになりました。



この日はホストの自宅へ帰宅した後、夕食にレストランへ連れて行って頂きました。日本では珍しい鹿肉が食卓に並び、おいしさにとても感動しました。レストランの裏山でハントしたてのものだと聞き、「ドイツに来たんだなあ」としみじみと感じました。

二日目(9月15日)

この日はアウクスブルクの市庁舎で市を表敬訪問し、その後この市の誇るフッゲライ、ブッペンキステの舞台裏を見学しました。

この日の訪問で最も面白かったのが、世界最古の社会住宅「フッゲライ」の見学でした。世界史の教科書にも載る、フッガー家によって建てられた由緒ある社会住宅は、当時の人々の生活様式や社会情勢を今にも伝えていました。識字率の低かった人々が自分の家を見分けられるよう取り付けられ



た呼び鈴、寒い冬にも暖かい部屋で客人を迎えられるように作ら

れた扉レバー、至る所に取り付けられた鍵など、見慣れないものの「確かにあったら便利かも」と思わせる生活の工夫が様々な所に詰め込まれていました。そして何よりも、何年もの歴史を経て今なお利用されていることこそが、この施設の重要性を物語っているように感じました。

三日目(9月16日)

私の今回の旅のテーマは、「ドイツの歴史・人権教育について学ぶ」ことだったので、この日訪れたダッハウ強制収容所は私にとって目玉の一つでした。

生々しく残るむち打ち台、押し込められるよう

に並べられた寝台や焼却炉は、解説で聞くのと実際に



見るのでは衝撃の大きさが違いました。

戦争を経験したことのない私には当時の悲惨さは想像することしかできませんが、この収容所を見学することで今自分が平和な世界で生きていることを痛感しました。そしてまた、ドイツの人々が過去の行いを隠すのではなく正面から受け入れ、平和を保っているのは、ドイツの教育と人々のたゆまぬ努力の結果なのだと思います。

四日目(9月17日)

この日はアウクスブルク市から少し足を伸ばし、ノイシュヴァンシュタイン城を見

学しました。以前ドイツを訪れた際に訪問したことがあったのですが、相変わらずの美しさに再度圧倒されました。

この城の建設は1868年、ルートヴィヒ二世のオペラ「ローエングリン」への情熱から始まったそうです。この年、日本では奇



しくも旧幕府と新政府の対立である、戊辰戦争が勃発しました。当時、日本の天皇家は、崇拝の対象ではあるものの、権力者からは程遠い所に位置していました。趣味で城を

作ることができるほどの強い権力を有していたドイツの王族に驚くとともに、感心しました。

五日目(9月18日)

この日一番印象的だったのは、ギムナジウムの見学でした。視察させて頂いた、12歳の生徒を対象とする物理のクラスでは、

磁力のしくみについて学習していました。実験道具を使



い、磁力に反応する物質を調べる生徒たちの表情はとても楽しそうでした。

日本とは大きく異なる教育制度を採用す

るドイツでは、10歳で進学先を選択するため、幼い頃から自分の夢や適正を見極める必要があります。また、その後の進路も人により大きく異なるため、学校では実験室が比較的自由に使用できるなど、生徒の自主性・自立性が育成されるような工夫作りが行われていました。

六日目(9月19日)

今回の旅でもっとも苦労したのがフェアエルパーティーの余興でした。私たちのグループでは書道の実演をする予定でした。出発前から四苦八苦しなながら計画を練り、出発直前まで準備してきた出し物でしたが、直前に変更を余儀なくされるというハプニングがありました。パーティー中は「うまくいかないのでは」と心配のあまり正直全く楽しむことができませんでした。それでも、なんとかみんなで書道をやりきることができ、終わってみれば印象深い思い出になったと思っています。

七日目(9月20日)

最終日のこの日は、ホストファミリーと過ごす一日ということで、サッカー観戦とビアフェスに連れて行って頂きました。私はとりわけ熱心なサッカーファンではないのですが、初めて見た生試合、激しいゴールの応酬、ファンの熱烈な応援に興奮しっぱなしでした。この試合で隣に座った現地の学生達とも仲良くなり打ち解けられたのはとても良い思い出になりました。

ビアフェスでは流石ビール大国と思わせる華やかなお祭りが開かれていました。地元の人たちは男女ともに民族衣装をまとい、楽しげに踊っていて、この伝統的なお祭り

が人々に愛されているのがしみじみと伝わってきました。

最後に

1週間アウクスブルク市で過ごし、この町やそこに住む人々に少し慣れ親しむことができました。今後は、この旅を通して学んだアウクスブルク市及び尼崎市の美点を周りに発信していき、二都市間の架け橋の一部となりたいと思います。